

山田裕康さん追悼の記

風呂本 惇 子

山田裕康さん。私よりずっと年下の、しかも頻繁に渡米する活力に満ちていた彼が、こんなに早く逝ってしまうとは。今もなお信じられない思いだが、不在になってもう一年が経ったのだ。学部長の要職に就かれたことを風のうわさで耳にする以前から会う機会がほとんどなかったので、私の記憶にあるのは、失礼な言い方ながら「長」の付くポストには似合わない万年青年みたいな昔のままの山田さんなのである。

初めて会ったのは1970年代前半。私自身も所属して間もなかった「黒人研究の会」の送年会に、新入会員として現れたときだ。まだ院生か、あるいは院を終えたばかりの頃だろう。大きな目に宿る眼光も、手拍子を打ちながら歌う朗々たる声も、若いエネルギーにあふれていた。以後、研究会で会う彼はいつも既成の何かに腹を立てていたような印象があるが、妙にはにかみやの面もあり、独特の存在感を漂わせていた。その存在感は、人柄に加えて研究分野に負うところが大きい。アフリカ系アメリカ人の詩と音楽に関する造詣の深さは、その分野で彼が遺したたくさんの業績を見れば一目瞭然である。アフリカ系ミュージシャンの来日公演に研究会の仲間たちといっしょに出かけたこともよくあったが、会場の雰囲気になじろぎがちな私と違って、山田さんはいつも水を得た魚のように生き生きと溶け込んでいた。70年代後半から今世紀初めにかけて、ほぼ四半世紀の間に私が彼と共同で体験したいくつかの仕事を思い返してみると、そこにはいつもアフリカ系アメリカ人の詩と音楽があった。そして年月の経過に伴い、もう一つ加わった共通項がカリブ文化への関心である。共同の仕事のいくつかを回顧して、山田さんのありし日をしのびたい。

ケニアのナイロビで開かれた国際婦人年 NGO フォーラム（1985年7月）に参加したとき、私はアフリカ系アメリカ人女性作家アレクシス・デヴォーと出会い、ビリー・ホリデイの生涯を散文詩で綴った自作の *Don't Explain*（1980）を贈られた。翻訳を約束したものの、帰国してよく読んでみると黒人音楽の世界に詳しい人の助けがなければ容易な仕事ではないとわかった。共訳を頼めるのは山田さん以外に考えられなかった。この共訳作業を通して、私は彼から多くのことを学ばせてもらった。『言いわけしないで——ビリー・ホリデイの歌』（国文社、1986）の「訳者あとがき」は山田さんのビリー・ホリデイ論と私のアレクシス・デヴォー論で“書き分け”であるが、読み返してみると、アカデミズムに傾きがちな私の堅苦しさを彼の感性が補ってくれていたのだ、と実感する。翌1987年6月、私たちはデヴォーを日本に招き、「黒人研究の会」全国大会を始め、関西や四国、東京で自作の詩の朗読や講演をしてもらった。一連の活動のなかで今も強く印象に残っているのは、大阪のあるジャズ喫茶での朗読会である。私がアレンジしたのは大学での講演ばかりだっ

だが、山田さんはビリー・ホリデイの伝記作者によりふさわしい場を設定してくれた。ジャズ喫茶で聴衆の輪に囲まれ、デヴォーが英語で、私が日本語で、『言いわけしないで』の一部を朗読したあのときの高揚感が、今鮮やかによみがえってくる。山田さんがジャズ好きの人々から「ヒロ」の愛称で呼ばれているのを知ったのもこの時である。

次の共同作業は1994年の秋。読売新聞社とNHKが主催した「ノーベル賞受賞者を囲む“フォーラム 21世紀への創造”」は、物理、化学、生理・医学、経済、歴史、文学などの分野における海外及び日本の受賞者たちの講演と、彼らと日本の研究者や一般の人々が討論するワークショップから成る大きなプロジェクトだった。文学部門では1992年度受賞者でカリブ出身の詩人デレク・ウォルコットが招かれ、会場校となった甲南女子大の青木次生氏、立命館大の加藤恒彦氏、そして山田さんと私の計四人がパネリストになった。私は行きがかり上、組み込まれたようなものだ。最初、主催者側は私が当時勤務していた神戸女学院大学の講堂を会場に考えていたが、大学側の都合でそれが不可能になり、会場校を変えて仕切り直したという事情があったからである。私がすでに自分の研究の中心をアメリカ黒人文学からカリブ文学に移していたのは事実だが、詩には疎かった。率直に言って、当時、四人の中でカリブ文化にも詩にも“at home”でいられたのは山田さんだけだったのではないだろうか。それでも各々の勉強の成果がエッセイに実り、10月の読売新聞の文化欄にシリーズで掲載された。私は『オメロス』に集中し、そのとき学んだことは現時点でも自分の研究に大いに役立っている。山田さんのエッセイは劇作家・演出家としてのウォルコットに焦点を当てていた。カリブ海の演劇を西洋の影響から解放とうとし、地域に根差した演劇集団「トリニダード・シアター・ワークショップ」を創造したウォルコットが、日本の歌舞伎や能の影響を受け、カリブの文化を巧みに融合したという興味深い内容であった。彼はこれを書くためにニューヨークへ飛び、読売の記者に同行して演劇練習中のウォルコットを訪れ、インタビューにも付き合ったと聞いている。

ウォルコットは11月に来日し、まず東京千駄ヶ谷の津田ホールで講演・討論会が行われた。このときの小さなエピソードをここで書いても山田さんは怒らないだろう。私たち関西勢も参考のために聴いておくことになり、主催者側の「過度」なほどに丁重な配慮を受け、帝国ホテルに泊まることになってしまった。超豪華な部屋は私にとっても全く安眠の場とならなかったが、翌朝山田さんに出会すと、「部屋が広すぎて寒々しくて風邪を引いてしまった」とぼやいたのである。実際、彼は鼻をグスグス言わせていた。長い間イギリスの植民地にされ、ようやく自治権を得たものの貧しさを引きずっているカリブ海セントルシアに生まれた詩人・劇作家の描く世界に、作品を通してのみ浸っていた私たちの心が、現実とのギャップについていけないことを身体が暗に示しているようで、苦笑してしまった。関西での講演・討論会は11月16日。甲南女子大の大講堂は学生を始め一般からの希望者も多数参加して満員となり、講演の部分はNHK テレビでも放送された。恥ずかしいことに、そのあとの討論会で自分が言ったこととそれにウォルコットがどう反応したかということだけははっきり覚えているけれども、他のパネリストたちの言ったことはほとんど記憶に残っていない。よほど緊張していたのだろう。

その次の共同作業は、1998年の夏に立命館大学で行われた「京都アメリカンスタディーズ・サマー・セミナー」のときだ。このセミナーでは、毎夏アメリカから社会学・歴史学・文学の分野ごとに著名な研究者を招き、彼らの講演のあとに日本の研究者の発表するワークショップが組まれ、すべてが英語で運営される。この年、文学部門で招かれたのはアフリカ系アメリカ女性文学の批評家で今は亡きバーバラ・クリスチャンだった。日本側ワークショップの企画や討論者の選定に関った加藤恒彦氏と私は、最終となる三つめのセッションに「カリブ系アメリカ女性作家」を組み込んだ。賛同が得られたのは、日本のアメリカ研究の世界でもカリブ文化の重要性に対する認識が進んできたからであろう。発表者に新進気鋭の若手を、司会やコメンテーターに年長者を置く方針で、私がコメンテーターを務めるこのセッションでは山田さんに司会をお願いした。英語討論に緊張気味だったフロアの若手参加者に優しく気を配る山田さんは、確かにもう「年長者」になっていた。

翌1999年から私は奈良女子大学に勤務することになり、2000年と2001年、二回続けて「黒人研究の会」の全国大会をそこで開催した。2000年の時は、山田さんの仲介で“Voice of Peace”という数十人から成る日本のゴスペルシンガー・グループが来て熱唱した。重要文化財である奈良女子大の講堂を揺るがすようなその迫力は、大学の同僚の間でも語り草になった。2001年のときも山田さんの紹介で、カリブ海ドミニカ共和国生まれのシンガーソングライター兼パーカッショニストのホセ・ドゥルック氏が珍しい楽器を持参し、演奏してくれた。山田さんの音楽関係の人脈の広さはすばらしかった。

2000年の12月。アメリカ文学会関西支部大会のシンポジウム「アメリカ文学とニューオーリンズ」で私は司会を務め、この町と関係の深い作家たちを五人のパネリストに論じてもらった。そのうちの一人である山田さんはニューオーリンズを拠点に活動していたアフリカ系アメリカ詩人たちのことを、通常のように原稿を読むのではなく、手に何も持たずに持ち時間一杯、よどみなく語ったのである。語るべきことは頭の中にすべて入っていたのだ。このシンポジウムでは、会場にジャズを流したり、ニューオーリンズに関するビデオを編集して上映したり、休憩後に参加者に席に戻ってもらう合図として「聖者の行進」を奏でたり、いろいろ楽しい工夫を凝らしてみた。どれも山田さんの協力のおかげである。翌年、このシンポジウムをベースにして私の編集により、『アメリカ文学とニューオーリンズ』（鷹書房弓プレス、2001）が出版された。その中に山田さんの「ブラック・ニューオーリンズ」が収められている。黒人音楽のシンボルのようなこの町で“見えざる”状況にあった詩人たちに光を当て、「多元文化社会に向かうアメリカを考慮するなら第一列に加えるべきだ」と結んでいる。これが彼との共同作業の最後になった。

山田さんの遺した音楽関係資料は、「黒人研究の会」の先輩たちの尽力により整理され、会の発祥地である神戸外国語大学の図書館に収められたという。若い後継者たちが活用してくれれば、彼は喜ぶだろう。追悼の記を書くことによって、貴重な友人を失ったのだ、という喪失感は増したが、その一方で、彼の人生の意味をあらためて考えることができたように思う。それ故に、これを書く機会を与えていただいたことに深く感謝している。